



医学教育学教室 〒181-8611 三鷹市新川6-20-2 電話: 0422-47-5511 (代) Fax: 0422-44-1930

## Contents

- ◆ 初期教育としてのプレチュートリアル 統合生理学教室教授 大木紫 ..... 1
- ◆ JACME医学教育分野別評価の受審(2巡目)について ..... 2
- ◆ 医学教育学教室の新しい試み⑤ 助教 三枝七都子 ..... 3
- ◆ 卒業生便り⑧ 研修医 青山稔 ..... 4



## 初期教育としてのプレチュートリアル

統合生理学教室教授  
医学教育センター  
アクティブラーニング室長  
大木紫

### 【導入の経緯】

杏林大学医学部のチュートリアル教育は、2004年(平成16年)に開始する。そのころ、全国の医学部で卒前教育の改革が行われ、杏林大学でも見直しが進んでいた。その時、先頭に立ってカリキュラムを立案され、教員への教育を行われたのが医学教育学の赤木美智男先生(現客員教授)で、その一つがチュートリアル教育の導入だった。

チュートリアル教育といっても、当時の教員は(私も含め)見たことも聞いたこともない状態で、赤木先生のご苦労は大変なものだった。先生は日本で最初にチュートリアル教育を導入した東京女子医大の講師を招き講演会を行い、更に東京女子医大の学生たちによる模擬チュートリアルを見せてくれた。ただ、そのような説明があっても、このような教育が本当に役立つのか大部分の教員が半信半疑だった。

4年生で行われている症例検討を行うチュートリアルは理解できたが、入りたての1年生にチュートリアルを行う必要性がよくわからなかった。しかし、上述の通り2004年に杏林大学でも初めて、1年生への6週間のチュートリアルが実施された(現在では11週)。そして、1年生へのチュートリアル(プレチュートリアル)は、コロナ禍で対面でのディスカッションができなかった期間も乗り越え、現在もほとんど原型のまま続いている。何よりも、基礎系教室の教員が、毎年熱心に参加してくれるのが大きな要因だと思う。

### 【プレチュートリアルの構成】

1年生で行われるプレチュートリアルは2つの

内容に分かれている。このうち、チュートリアル教育はプレチュートリアルI(2026年度からプレチュートリアルA)と呼ばれる。現在ではPBL(problem-based learning)チュートリアルと呼ばれるように、学習者が事例をもとに問題を見つけ、発見した問題を自分で解決することにより学ぶ方法で、その過程をチューターと呼ばれる教員が補助する。学生は1課題につき4回のsmall group discussion(SGD)を行い、5回目に学習した内容をプレゼンテーション、あるいはレポートにまとめる。第1と第2課題はテーマが異なり、毎回1-2枚の課題シートをもとに学生が学習項目を抽出、各自自己学習を行って、次のSGDで学習内容を発表する。各グループは7-8人で1人のチューターが付き、第2課題で班替えが行われる。

	テーマ	内容
1	ガイダンス	進め方、レポートの書き方、ICTについて
1	課題① SGD-1	チューターを含めた討論会
2	課題① SGD-2	チューターを含めた討論会
3	課題① SGD-3	チューターを含めた討論会
4	課題① SGD-4	チューターを含めた討論会
5	発表会	発表会(またはレポート作成)
1	課題② SGD-1	チューターを含めた討論会
2	課題② SGD-2	チューターを含めた討論会
3	課題② SGD-3	チューターを含めた討論会
4	課題② SGD-4	チューターを含めた討論会
5	発表会	発表会(またはレポート作成)

## 【プレチュートリアルの意義】

医学部初期教育でのプレチュートリアル教育の意義は何だろうか。もちろん、大学に入ったばかりの新入生で、クラスにも知らない人が多く、いろいろなクラスメートと共同作業を行って知り合う機会を作る、という面もあるかもしれない。しかし、その役割は、別のカリキュラム（杏林大学では早期体験学習など）でも担えると思う。プレチュートリアルの目標として、1. グループ討論を通して、コミュニケーション能力を身につける、2. 自分の知っていること、知らないこと、学習すべきことを明らかにする、3. 課題から社会医学的側面など総合的に考える、4. 学習のための資源を自分で発見し、利用する、5. 自分（達）で設定した学習目標に向かって、積極的に学習する、6. 学習の過程や成果について自己評価し、次の目標を設定する、などが挙げられている。どれも、医学部生・医師として必要とされる姿勢で、M1からこの姿勢を学んでもらうのがプレチュートリアルの目的なのかもしれない。

	1回目	2回目
2025	骨髄移植	AI
2024	出生前診断	脳のエネルギー消費・代謝
2023	骨髄移植	病理学
2022	ワクチン	ミトコンドリア

## 【プレチュートリアルの問題点】

もちろん、プレチュートリアルにも問題点はたくさんある。あるいは、問題点しかないといっても過言ではない。

まず、最大の問題は、チューターの負担が多すぎることだろう。前述の8回のSGDへの参加に加え、SGD最中の態度の評価、自己学習の内容の評価、プレゼンテーション・レポートの評価、とかなりの時間を割いてもらっている。

また、最近では生成AIを用いることによる問題も生じている。生成AIを使えば、自己学習も、プレゼンテーション・レポートも、自分の労力を使わなくてもそれなりのものができてしまう。しかし、現在のところ生成AIには間違いもあり、プレチュートリアルIのレポートにも、存在しない文献が引用されていたこともある。

生成AIを使用する利点も多くある。今後は、使用したことを明示し、かつその内容について何度か生成AIに指示を出して修正することが必要だろう。おそらく、我々よりも学生の方が、早く使い方をマスターするだろうが。

## 【最後に】

プレチュートリアルには問題点も多くあるが、医学部の初期教育として必要な内容も含まれている。今後も必要とされる限り、内容を修正しながら続いていくことになると思う。基礎教室の教員の熱意に感謝したい。



## JACME医学教育分野別評価の受審（2巡目）について

今年度は2巡目のJACME医学教育分野別評価を受審する年となり、2025年9月に自己点検評価書を提出、12月2日～12月5日にかけて評価チームによる実地調査を受けました。この2巡目の受審に向けては、1巡目の受審に対応した「分野別評価室」を「教育改善委員会」に改組し、臨床、基礎を網羅する教員と職員組織体制を更に強化・構築して臨みました。

医学教育学教室教員も全員が教育改善委員会のメンバーとなり、この7年間医学教育の改善に尽力してきました。医学教育学教室としてイニシアチブをとった改善としては、行動科学の系統化、早期体験学習や臨床実習の拡充などが挙げられます。7年の間にはコロナ禍という困難な時期がありましたが、その渦中で試行錯誤しながら企画した代替プログラムが、好評を受けてコロナ禍後も定着するといったこともありました。

それぞれの教室や部署が日々築き上げてきた改善を、自己点検評価書に十分に落とし込めたか、実地調査において評価員の方々へ十分にお伝えできたのか、JACMEからの評価報告書をお待ちすることとなりますが、この2巡目受審という機会をもって、一旦医学部教育改善の総括ができたことに今は安堵しています。



## 医学教育学教室の 新しい試み⑤

# M2研究室配属における 医学教育学教室プログラム ～Dementia x Self-Transformation : 認知症と紡ぐ、学生による当事者研究～

助教 三枝七都子

本学医学部では、2025年度からM2での1週間の研究室配属が必須となりました。この研究室配属では、学生は各教室が企画したプログラムを1つ選んで1週間の実習を行うこととなります。医学教育学教室でもいくつかの企画を実施し、その一つが「Dementia × Self-Transformation : 認知症と紡ぐ、学生による当事者研究」（以下、「学生による当事者研究」）です。ここでは、学生が認知症の当事者に関わる経験を通して、自分の価値観や思い込みがどのように変化していくのかを振り返り、その過程を学生自身の言葉でまとめます。

では実際に、学生はこの経験のなかで何を感じ、どのように考えが変わっていったのでしょうか。ここからは、2025年度に参加した学生の体験記をお届けします。

杏林大学医学部に在籍している平野桜子です。今回、私は杏林大学医学部の研究室配属の一環として「学生による当事者研究」に参加し、東京都八王子市の「DAYS BLG!はちおうじ」で4日間、そこに集う認知症のある方々（現場では、メンバーと呼ばれています）と時間を共にすることで自己の価値観の変容プロセスの過程を記録しました。この経験を通して、認知症に対して自分が持っていた価値観や思い込みが大きく揺さぶられ、変化していく過程を実感しました。

参加前の私は、認知症のある方に対して「意思疎通が難しく、常に支えなければならない存在」というイメージを持っていました。そのため、最初は「自分が何かしてあげなければならない」「危険がないように見守らなければならない」と身構えていました。しかし実際には、わからないことを教えてくれたのはメンバーさんたちであり、緊張していた私に自然に声をかけ、会話の輪に入れてくれたのも皆さんでした。そこにあったのは、支える側と支えられる側という一方向の関係ではなく、一人のひと一人のひととして関わる対等な関係でした。この体験によって、私の中にあつた「健常な自分」と「認知症の患者さん」という境界線は大きく揺らぎました。

また、特に印象に残ったのは、認知症による「忘れる」という出来事の捉え方です。私は当初、それを深刻で触れてはいけないことのように考えていま



メンバーさんたちとともに、近隣のお年寄り宅で草むしりに取り組む様子

した。しかし現場では、「どうせ5分後には忘れるよ」といった言葉が自然に交わされ、メンバーさんたち自身もそれを笑いに変わっていました。そこでは、忘れることが責められるべきことでも、隠すべきことでもなく、その人らしさを含んだ日常の一部として受け止められていました。この光景を見て、私は自分が「忘れてはいけない」という固定観念に強く縛られていたことに気づきました。

4日間を通して学んだのは、「当事者と向き合う」というより、「当事者と同じ方向を見る」ことの大切さです。医療者として患者さんを理解し支えようとするとき、まず必要なのは病気だけを見るのではなく、その人の暮らしや思いに目を向けることなのだと思いました。今後、医療の現場で患者さんと関わる際にも、相手を「支援の対象」としてではなく、一人の生活者として尊重し、丁寧な対話を重ねていける医療者でありたいと強く感じています。



DAYS BLG!はちおうじの講演活動にも、メンバーさんたちとともに参加。奥から、平野さん、メンバーさん、DAYS BLG!はちおうじ代表の守谷さん。

**DAYS BLG!はちおうじ：認知症のある人も含め誰もが役割を持ち、「やりたい」を実現しながら地域とつながる共生の場。本人の声を起点に社会参加を広げ、新しいまちづくりを実践しています。**

## 心臓外科志望の研修医からみた釧路の魅力

釧路孝仁会記念病院 研修医  
青山稔 (2025年卒)

私は学生時代より進路を心臓外科に定めており、卒後3年目より母校である杏林大学の心臓血管外科に入局する予定です。私は生まれも育ちも東京ですが、今後も東京で心臓外科医として暮らすならば最初の2年間くらいは関東以外の地域に住み、研鑽を積みたいと考えていました。

私はバスケットボール部に所属していましたが、医学部4年次に東医体が苫小牧で開催され、人生で初めて北海道の地に降り立ちました。夏は涼しく、海鮮に限らず食材がどれも美味しいことですから北海道の虜になり、北海道で循環器が豊富に経験できる施設を探した結果、ご縁があり現在の勤務先である釧路孝仁会記念病院から内定を頂きました。



釧路孝仁会  
記念病院

皆さんは釧路に来たことはありますか？釧路湿原、世界三大夕日（幣舞橋）、阿寒湖温泉、そして美味しい海鮮が魅力的な街です。夏は30℃を超えず、冬は積雪が道内において比較的少ない地域であり、北国初心者も安心して暮らすことができます。道東の美味しい食材を堪能するには刺身や寿司、炉端だと思っておりましたが、イタリアンという選択肢があることを知り、最近ハマっています。



よく行くイタリアンのスペシャリテでもある「鹿肉のロースト」は、是非皆さんにも食べていただきたいです。

一方で北海道は特に喫煙率の高い地域であり、さらに釧路は寒冷な気候、港町という地域特性から塩分摂取量も多く高血圧、動脈硬化のリスクが高いです。そのため循環器領域では特に急性冠症候群や大動脈解離、大動脈瘤、下肢閉塞性動脈疾患などといった症例が非常に豊富です。「霧のまち釧路」などと言われてはいますが、個人的には

「動脈硬化のまち釧路」と呼んでいます。当院は研修医の定員が1学年2人までとなっており、上記の豊富な症例すべてに携わることができます。研修医同士の手技の争奪戦ありません。魅力的だと思いませんか？この度、医学教育学矢島教授のご高配により、当院は学外クリニカルクラークシップの実習先として選択できる施設となりました。後輩の皆さん、私がいる間にたくさん来てくれたら嬉しいです。実習でも見学でもいつでもお待ちしております。一緒に美味しいご飯を食べましょう♪

生まれ育った東京を離れ、1人で釧路に来たばかりの時はとても寂しく、早く東京に戻りたいと思っていました。しかし、釧路で出会った皆さんは大変温かく、釧路を去る日もまた来てほしいのです。残り約1年の釧路生活、悔いのないように1日1日を大切にしていきたいと思います。

この度は、寄稿の機会を賜り、誠にありがとうございました。

### 編集後記

2022年度から学外施設での臨床実習を大々的に開始したことは第3号でお伝えしました。当時は100程度だった施設数は3年を経た2025年には200余となり、その結果、地方での臨床実習経験を経て、地方病院を初期臨床研修先を選ぶ杏林生は増加傾向にあります。臨床に入っていない低学年向けの体験学習にご協力くださる地方医療施設も増えました。学びの場をご提供くださる皆様へ感謝申し上げる次第です。 (編集部)